

森鷗外「雁」の世界

篠原義彦

教育学部国文学研究室

(一)「雁」の中絶

森鷗外の小説「雁」は明治四十四年九月一日発行の雑誌「昴」第三年第九号にその「尅」「式」及び「参」が発表されたのが嚆矢である。作者五十歳の年のことであつた。続いて十月一日発行の第十号に「肆」「伍」、十一月一日発行の第十一号に「陸」「漆」、十二月一日発行の第十二号に「捌」「玖」が発表され、翌四十五年二月一日発行の第四年第二号には「拾」「拾尅」が発表された。「雁」の「拾」には、末造を前にした無縁坂の女お玉を描いた「細かい器械がどう動くかは見えても、何をするかは見えない。常に自分より大きい、強い物の迫害を避けなくてはゐられぬ虫は、⁽¹⁾ mimicry を持つてゐる。女は嘘を衝く。」という注目すべき一文がある。因みに「拾」の発表される一か月前の四十五年一月一日発行の「中央公論」第二十七年第一号には五条子爵家の嗣子秀磨の擬態の構図を描いた思想小説「かのやうに」が掲載されている。

「雁」の「拾尅」が「昴」に発表されたのが三月一日のことであり、四月一日発行の第四年第四号には「拾参」「拾肆」が発表された。この日、すなわち四月一日発行の「三田文学」第三巻第四号には「灰燼」の「拾参」が掲載されており、谷田家のお嬢さん「お種さん」に接近したがるお光さんこと相原光太郎と山口節蔵の出会いが描かれている。

「かのやうに」に続く秀磨ものである「吃逆」が「中央公論」第二十七年第五号に掲載されたのが五月一日のこと、夏目漱石の「彼岸過迄」の朝日新聞掲載が終りを告げたのが前月二十九日のことであり、五月一

日発行の「昴」の消息欄には、「○与謝野夫人は五月五日の夕刻新橋を出る汽車でいよいよ東京を立つ。西比利亜鉄道。道中は絵で和装。○同夫人の『新訳源氏物語』の中巻は目下印刷中。○森鷗外氏の近作も近々出版される相だ。○同氏の文芸調査委員会から囑托されたファウストの翻訳ももう疾に出来上つてゐる由。」なる記事とともに、

○石川啄木氏が死んだ。氏は去年の初、大に腹が出張つて力がついた様な気がする云つて居た頃、既に顔色は蒼黒く、明星で盛に詩を作つて居た当時の美少年の面影はなく、顔などは骨ばつて、眼は落窪んで、それでも、その前に逢つた時なぞよりは、例の心の中の矛盾を示す様な眼つきの中に、何だかすがやかな色が見えてゐたけれども、それから間もなく病気が悪くなつて大病院へ入院した。夜勤になつてから兎角不規則勝で、新聞社から帰るのが十二時すぎ、それからどうしても飯を食はねばならぬ、食つて直ぐ寝る、それが悪かつたんだらうと云つて居た。枕元の病状を書いた板を見ると、その時分はまだ腹膜だけであつたのが、間もなく肋膜にうつつたが、肺の状態は退院する時まで丈夫な普通の人よりも健全な位であつた。退院したのは氏が一寸病症がどの位であるか聞きたいため、うつかり退院時期を聞いたためであると氏が云つて居た。病院で最初に氏を受つたのが栗山茂氏の兄有馬医学士であつたが、病室が余り汚いので却つてよくないと思つて、それにその病室には結核患者が同室してゐるので新病室にうつした。随つて受持も退院当時には變つてゐた。有馬医学士は石川一と云ふ人は病床にゐてしよつちう物を書いてゐる、悪いんだけれど、

ああ云ふ思想に生きてる人にそれをとめるのも気の毒だから、大眼に見てゐると云つて居た。それが「病院より」⁽³⁾である。退院後有馬医学士は無報酬で氏を介抱して居た。けれども、その時分からもう一年持ちますか、ひよつとして一時起きられる様な事はあつても、しまひには死ぬんでせうなど云つて居た。何しろ氏一人の病気の体で老父母と夫人と子供とを養つて行つて居たので、死ぬまで寝たきりで、その間に種々の計画もあつたが、何分そんな体で何も出来ず、とうとう、死んだのはむしろ氏に取つては楽を得た様なものであつたらう。その間東京朝日では月給を払つてゐた。なほ今年一杯は遺族にそれを送る筈である相だ。

という江南文三の手になる文章が見られる。啄木の死はこの年の四月十三日午前九時三十分のことである。享年二十七歳、死因は肺結核であつた。

六月一日発行の「昂」第六号には「拾伍」、「拾陸」、続く七月一日発行の「昂」には「拾柒」、「拾捌」が発表され、「雁」の物語は次第に佳境に入ることになるが、この月三十日には明治天皇の崩殂により大正と改元された。そして、二日後の大正元年八月一日発行の「中央公論」第二十七年第八号には書簡体の小説「羽鳥千尋」が掲載されている。因みに鷗外の日録六月十九日の条には「服部千尋危篤なるを聞き、石田吉治を派遣す。」⁽⁴⁾とある。「病氣を自覚してから五年目、速成の目的を以つて医術開業試験に志してから四年目に、後期実地試験文を残して、二十四歳で死んだ。」⁽⁵⁾という羽鳥千尋の生への着目は、計らずも二か月にして鷗外に望外の僥倖をもたらすことになる。歴史小説「興津弥五右衛門の遺書」の創作である。「羽鳥千尋」、「興津弥五右衛門の遺書」はともに書簡体小説である。

大正元年九月一日発行の「昂」第三卷第九号の巻末紹介欄には、六月二十日東雲堂書店より刊行された啄木の第二歌集「悲しき玩具」のこと

が記されている。

石川君の短歌集である。私は之を手にして石川君の内的生活を考へた。石川君は詩人から思想家に転じようとして煩悶して居る間に死んで了つた。四十四年の一月「日本文学」が余りに夢で、余りに別天地で、人生の實際と余りに没交渉なる⁽⁶⁾ことを獄中から罵つてよこした秋水君の書面を読んで、石川君は喜んで居たことなどもあつた。(それが私との間に於ける最終の談話の交換であつた) 私はこの集の歌をこの意味に於いて読んで見るべきものだと思ふ。

というSH生こと平出修の紹介文の重要性については十分留意すべきであるが、同誌に鷗外は「雁」の「拾玖」を発表するとともに、同じ九月一日発行の「三田文学」に「灰燼」の「拾陸」を発表している。明治四十四年十月、「雁」の「肆」、「伍」を「昂」に発表する一方、「灰燼」の「壹」を同じ十月一日発行の「三田文学」に発表して以来の、両作品の並列展開という構図はこの月をもって終りを告げることになる。

すなわち、乃木大将希典の死を象嵌した「興津弥五右衛門の遺書」が「中央公論」に発表された十月一日、鷗外は「灰燼」の「拾柒」を「三田文学」に発表し、続く「拾捌」を十一月に発表するが、「灰燼」は十二月一日発行の「三田文学」第十二号に掲載された「拾玖」で未完のままその幕を閉じることになり、一方、「雁」は翌大正二年の春までしばしの安眠を貪ることになる。その間、鷗外は十月一日十一月一日及び十二月一日発行の「昂」に翻訳「田舎」を発表し、続く大正二年一月一日の「昂」に「馬丁」を発表している。翻訳「馬丁」はその後二月・四月・六月・七月号の「昂」を飾ることになるし、一方、「三田文学」には一月号から四月号にかけて翻訳「復讐」を発表するとともに、「中央公論」第二十八年第一号には歴史小説の第二作「阿部一族」を発表している。

未完のまま終わった「灰燼」の終末は以下のとおりである。
節蔵は新聞国の人民を類別して、博物学の叙述のやうに書いた。そ

の体裁は間々に習作めいた短い話を幾つも挿入であるので、ここに筋書をした程乾燥無味では無かつたが、どうしても小説らしくは見えなかつた。節蔵の胸算では、此類別なんぞは小説らしくなくても構はずに、ずん／＼書いてしまつて、それを基礎にして別に書き起したいものがあるのである。併し人民の類別が思つたより長くなつて、なか／＼済みさうにない。とう／＼夜明近くになつたので、節蔵は少しでも好いから寝ようと思つて、床の中へ身を横へた。暫く目を瞑つてゐたが、妙に心が澄んで眠られない。そして自分の書かうと思つた事が頭の中に浮んで来る。それは新聞国の政変である。有力な政治家が出て、Coup d'étatのやうな手段で新聞を廃せようとする。此政治家がそれまでの決心をするには、通信員に自分の意図に慥ふやうな通信をさせようと思つて、奇正剛柔あらゆる手段を尽して見たが、どうしても安心して書かせて置かれるやうにはならない。そこで自分に謳歌してゐる時の愉快を犠牲にして、廃止を断行することになるのである。此廃止が、他の政治家や、新聞を書く人や、新聞を読む人に及ぼす影響は千差万別である。新聞維持説の政敵は政治家中にも少なくないが、書く人や読む人は悉く廃止の反対者で、その周章狼狽の様子は随分面白く書けさうである。中にも際立つて面白い出来事が二つ三つ画のやうに浮かんで出て、早く書いて貰ひたいと催促するやうに見える。或る一組の人達の間に起る会話や、或る街頭に現れる騒動は、濃厚な光彩を以て微細な所まで断片的に纏まつて現れて来る。それを追尋して行くうちに、節蔵は次第に意識の臆気なるのを感じて、いつの間にかぐつすり寝てしまつた。

節蔵が頭の中で描く新聞国をめぐる「血の出るやうな諷刺」の物語はあまりにも刺激的であり、かつ剣呑でもある。「灰燼」は当然未完のまま放置されるべきはずであつたし、たとえこれ以上筆を執つたとしても、前年、すなわち、明治四十四年七月一日発行の「三田文学」に発表され

た「Der Zensor」の翻訳「板ばさみ」との重複を免れない代物になつたはずである。「板ばさみ」の主人公プラトン・アレクセエフツチュアのカリカチュアの二番煎じは回避されるべきであつた。「板ばさみ」は翻訳であり、一方の「灰燼」は鷗外自身の手になる作品である。「血の出るやうな諷刺」は空想のままに放棄されるべきである。山口節蔵は「次第に意識の臆気なるのを感じて、いつの間にかぐつすり寝てしまふ」方が無難であつた。

「灰燼」は未完のまま放棄されたが、一方の「雁」は、その「式拾」が大正二年三月一日発行の「昂」第五年第三号に発表され、続く「式拾巻」が五月一日発行の「昂」第五号に発表された。「式拾」は岡田に蛇を殺してもらつたお玉の心理的変貌が描かれた部分であり、今まで単に「只欲しい物」であつた岡田が、たちまち變じてお玉の「買ひたい物」となり、末造の自由になりつつも、「目を瞑つて」岡田を想うお玉の成長が巧みに描かれており、「式拾巻」では、「買ひたい物」のできたお玉にとつて千載一遇の僥幸とでもいふべき末造の千葉行きという偶然が出来し、女中の梅を実家に帰して一つの企てをまくるむお玉の胸のうちが次のように描かれている。

けふに限つて岡田さんが内の前をお通なさらぬ事は決して無い。往反に二度お通なさる日もあるのだから、どうかして一度逢はれずにはまふにしても、二度共見のがすやうなことは無い。けふはどんな犠牲を払つても物を言ひ掛けずには置かない。思ひ切つて物を言ひ掛けるからは、あの方の足が留められぬ筈が無い。わたしは卑しい妾に身を墮してゐる。しかも高利貸の妾になつてゐる。だけれど生娘でゐた時より美しくはなつても、醜くはなつてゐない。その上どうしたのが男の気に入ると云ふことは、不為合な目に逢つた物怪の幸に、次第に分かつて来てゐるのである。して見れば、まさか岡田さんに一も二もなく厭な女だと思はれることはあるまい。いや。そんな事は確かに無い。

若し厭な女だと思つてお出なら、顔を見合せる度に札をして下さる筈が無い。いつか蛇を殺して下すつたのだつてさうだ。あれがどの内の出来事でも、きつと手を藉して下すつたのだと云ふわけではあるまい。若しわたしの内でなかつたら、知らぬ顔をして通り過ぎておしまひなすつたかも知れない。それにこつちでこれ丈思つてゐるのだから、皆までとは行かぬにしても、此心が幾らか向うに通つてゐないことはない筈だ。なに。案じるよりは生むが易いかも知れない。こんな事を思ひ続けてゐるうちに、小桶の湯がすつかり冷えてしまつたのを、お玉はつめたいとも思はずにゐた。

膳を膳棚にしまつて箱火鉢の所に帰つて据わつたお玉は、なんだか気がそはそはしてちつとしてはゐられぬと云ふ様子をしてゐた。そしてけさ梅が綺麗に飾つた灰を、火箸で二三度掻き廻したかと思ふと、つと立つて着物を着換へはじめた。同朋町の女髪結の所へ行くのである。これは不断来る髪結が人の好い女で、余所行の時に結びに往けと云つて、紹介して置いてくれたのに、これまでまだ一度も往かなかつた内なのである。

無縁坂の女お玉の情感がけなげな高まりを示した時、「雁」は「昂」への連載を中止した。あの「灰燼」が未完のままに終つてからわずか五か月後のことである。鷗外は前車の轍を踏んだかに見える。「灰燼」の終末部で示された新聞国の物語は二番煎じになりかねない代物である。しかし、「雁」には躍動がある。お玉の情感が最高潮に達した時の中絶である。「灰燼」が文字どおり灰燼であつたのに対して、「雁」には未来がある。一方、大正元年十月一日発行の「中央公論」に「興津弥五右衛門の遺書」を発表して以来、漸く緒についた歴史小説の世界の歯車を動かす必要性を、賢明な鷗外は十分に承知していたはずである。「雁」中絶二か月後の大正二年七月一日、「中央公論」に「鎚一下」を発表して秀磨もの、結着をつけた鷗外は、十月五日「ホトトギス」に「護持院原の敵討」を発表

し、「興津弥五右衛門の遺書」「阿部一族」の系譜を追うことになる。

そして、「雁」の「式拾肆」以下「式拾肆」の結末部は、大正四年五月十五日榎山書店から刊行された単行本「雁」で始めて陽の目を見た。同年四月一日の鷗外の日録には、「雁を書き畢り、榎山仁三郎に通知す。」とあり、また、五日の条には「雁を榎山仁三郎に交付す。」とある。小説「雁」は、漱石の「心」がそうであつたように、鷗外自身の明治という時代へのレクイエムでもあつた。あの「青年」の知的世界の構築のために切り捨てられた原初の明治の姿を鷗外はもののみごとに拾い上げた。小説「雁」が鷗外には珍らしくみずみずしい情調で彩られているのも無理からぬところである。

注

- (1) (英) 模倣、擬態
- (2) 「鷗外全集」(岩波書店、昭和四十六年・五十年刊) ⑧一五二七、以下同書による。
- (3) 正しくは「病室より」
- (4) ③一五六一
- (5) ⑩一五三二
- (6) 篠原義彦「森鷗外の世界」(昭和五十八年、桜楓社) 九九一〇一頁
- (7) ⑨一三三三

(二) 「雁」の構造

小説「雁」の構造は重層的である。「巷」から「式拾肆」に至る物語の世界に流れる時間をめぐつて、長谷川泉は極めて犀利な断案を下している。長谷川が、「雁」の時間の経過を追うと、この物語の末造・お玉の時間と、岡田・お玉の時間との重複部分は、わずかに明治十三年九月から年内までの三か月たらずの展開である。その短い期間の割に、物理的時間の経過以上に、人間の運命の機微と、心理の起伏・変転が描き出

されているのは、挿入された回顧的時間の、末造・お玉軸の長さとひろがりのゆえである。読者は、鷗外のその手法にたぶらかされがちなのである。」と指摘する二つの時間の流れを「雁」の巻から式拾肆の中に追尋するとすれば次のようになる。

すなわち、僕と岡田とが相識になるに至った経緯を描いた「壹」に始まるプロットの流れは、「貳」に至ってそれが明治十三年の九月の「もう時候が大ぶ秋らしくなつて、人が涼みにも出ない頃」のことであることを明らかにしつつ、岡田の前に「湯帰りの女」を登場させることになる。湯帰りの女はいつしか「窓の女」になるとともに、二週間の日数が経って岡田は無意識のうちに窓の女に脱帽して礼をするようになった。そんな岡田の心情が小青伝を媒にして次のように表現されている。「女と云ふものは岡田の為には、只美しい物、愛すべき物であつて、どんな境遇にも安んじて、その美しさ、愛らしさを護持してゐなくてはならない」ものである。そして、小青に同情した岡田の対女性の心情が「窓の女」の前で帽を脱かせはするが、岡田は依然として女の身の上を探ってみようとはしない。女の身なりや、住まいの様子から「困物」であるとは察しつつも、岡田は一步を踏み出す人間ではなかつた。岡田にとつて、女性には「只美しい物、愛すべき物」であることで十分であつた。

「壹」に始まる岡田と窓の女の物語は「肆」冒頭の「窓の女の種姓は、実は岡田を主人公にしなくてはならない此話の事件が過去に属してから聞いたのであるが、都合上こゝでざつと話すことにする。」の一文で突如として流れを中断することになり、長谷川のいう末造とお玉を軸とする過去の時間が展開することになる。その末造・お玉物語は勿論、末造とお常の抗争を介在させつつ、「ざつと話すことにする。」という注釈を無視するかのように「拾伍」に至るまで続くことになり、明治十三年九月の時間に回帰するのは「拾陸」においてである。「拾陸」の「無縁坂の人通りが繁くなつた。九月になつて、大学の課程が始まるので、国々

へ帰つてゐた学生が、一時に本郷界隈の下宿屋に戻つたのである。」の一節は、「貳」の「此話の出来事であつた九月頃、岡田は郷里から帰つて間もなく、夕食後に例の散歩に出て、加州の御殿の古い建物に、仮に解剖室が置いてあるあたりを過ぎて、ぶら／＼無縁坂を降り掛かると、偶然湯帰りの女が彼為立物師の隣の、寂しい家に這入るのを見た。」という一文と平仄が合っている。

「壹」から「参」に至る、岡田と無縁坂の女お玉との物語は、「肆」から「拾伍」に至る「此話の事件が過去に属してから聞いた」話によつて一度流れが中断され、「拾陸」になつてやつと旧に復することになる。そして、「肆」冒頭の一文、すなわち、僕という語り部の口上は、「式拾肆」の「僕は今此物語を書いてしまつて、指を折つて数へて見ると、もう其時から三十五年を経過してゐる。物語の一半は、親しく岡田に交つてゐて見たのだが、他の一半は岡田が去つた後に、図らずもお玉と相識になつて聞いたのである。譬へば実体鏡の下にある左右二枚の図を、一の影像として視るやうに、前に見た事と後に聞いた事とを、照らし合せて作つたのが此物語である。」という文章により、より鮮明なものとなる。小説「雁」は、①「壹」→「参」、②「肆」→「拾伍」、③「拾陸」→「式拾肆」という三つの部分から作られている。しかし、その物語の世界を時間的経過の中で把握することになると、①と②は逆転する。すなわち、②→①→③という流れが成立する。そして、②→①→③の最末尾を占めているのが、「上条へ帰つた時、僕は草臥と酒の酔とのために岡田と話すことも出来ずに、別れて寝た。翌日大学から帰つて見れば岡田はあなかつた。」という一文である。

自記材料明治十四年の条には、「三月二十日本郷龍岡町の下宿屋上条に在りて火災に遭ぬ。」とある。上条の「火事のあつた前年」から数えて三十五年に当るのが大正四年である。既に触れたようにこの年四月一日、「雁」の世界は完成した。岡田がドイツに去つてからの三十五年の

間に、お玉と「相識」になった僕がお玉自身から聞いた話によって支えられている②の部分の重みが「雁」の世界を支えている。「平タ・セクスアリス」十七歳の条の「秋貞」の娘の一件の最末尾に見られる「余程年が立つてから、僕は偶然此娘の正体を聞いた。此娘はぢきあの近所の寺の住職が為送をしてゐたのであった。」に相当するが②の部分である。「秋貞」の娘における表現を借用するとすれば、②は正しく無縁坂の女の「正体」を描いた部分ということになる。

「青年」が完結したのが明治四十四年八月一日の「昴」、一月後の九月一日発行の「昴」から「雁」の掲載が始まった。最終回の「青年」に次のような一節がある。

大村が恩もなく怨もなく別れた女の話をしたつげ。場合は違ふが、己も今恩もなく怨もなく別れば好いのだ。ああ、併しなと思つて見ても寂しいことは寂しい。どうも自分の身の周囲に空虚が出来て来るやうな気がしてならない。好いわ。この寂しさの中から作品が生れないにも限らない。

「銅人形」岡村を伴った未亡人坂井れい子の「正体」を箱根で目撃した小泉純一の心情を描いた部分である。「正体」を知った「寂しさ」の中から生まれたのが「雁」であった。その意味において「雁」は「青年」に踵を接する作品である。

「青年」の二十四に見られる「恩もなく怨もなく別れた女の話」というのは、明治四十四年五月一日発行の「昴」に掲載された二十一における大村莊之助の話に登場する三枝茂子のことである。初音町の下宿から団子坂の通りへ曲って、古道具屋をのぞいた小泉純一と文学好きの医学生大村莊之助が山岡鉄舟の鐘樓の前を下りて行く時、下から上がって来た女学生が三枝茂子であった。

茂子さんはそれ切り来なくなつた。大村が云ふには、二人は素と交互の好奇心から接近して見たのであるが、先方でもこつちでも、求む

る所のものを得なかつた。そこで恩もなく怨みもなく別れてしまつた。勿論先方が近づいて来るにも遠ざかつて行くにも、主動的にはなつてゐたが、こつちにも好奇心はあつたから、あらはに動かなかつた中に、迎合し誘導した責は免れないと大村は笑ひながら云つた。

迎合し誘導した責は免れないと大村は笑ひながら云つた。という茂子の「正体」が、断然興味を示した小泉純一の前にさらけ出されることになる。「それからさう思つてあの女の拳動を、記憶の中から喚び起して見ると、年は十六でも、もうあの時に或る過去を有してゐたらしいのだね。」——で始まる一節である。

「雁」一篇も「恩もなく怨もなく別れた女の話」である。お玉の方にも、そして、「こつち」に当る医学生岡田にも「好奇心」はあつただけから、ともに「迎合し誘導した責」はあるものの、所詮は「恩もなく怨もなく別れた」男と女の物語であつた。小説「雁」がそういう枠の中で成立するためには、下宿屋上条の晩飯に「青魚の未燻煮」が上る必要があつた。医学生岡田が小泉純一の轍を踏むことなく、女性が「只美しい物、愛すべき物」で完結するためには不忍の池の雁は哀れな最期を遂げなければならなかつた。岡田とお玉が無縁坂ではじめて会つた時から二人は「恩もなく怨もなく」別れなければならぬ手筈になつてゐた。「雁」は無縁坂の物語であると同時に、無縁坂に立つて、目の前を通り過ぎる岡田を目迎えて送るお玉の姿は鷗外森林太郎の姿でもあつた。医学開業試験を志して上京し、後期実地試験だけを残して二十四歳でこの世を去つた羽鳥千尋、貧窮と困迷の中で自らの命運を縮めてしまつた石川啄木の二十八歳の死に続いて、「摯突にして明敏、熱情にして雄健」(与謝野寛)なる平出修が三十八歳で身罷つたのは大正三年三月十七日のことであつた。鷗外の日録には、「晴。霜柱。寒稍退く。与謝野寛来て平出修の死を報ず。軍医学校にて解剖する手續をなす。」と記されている。お玉の美しく見張つた目の底に「無限の残惜しさ」が含まれていたように、鷗外その人の目は眼前を通りすぎて行つた若い才能に対する「無限の残惜

しさ」に支配されていたはずである。「雁」一篇は過ぎ去り行く明治という時代に対する鷗外のレクイエムであると同時に、羽鳥千尋、石川啄木、平出修らに対する鷗外の挽歌でもあった。「雁」の世界は「興津弥五右衛門の遺書」や「阿部一族」などの歴史小説の中で死を凝視した鷗外の情感の深まりを感じさせる作品であると同時に、過ぎ去りし時と過ぎ去りし人に対する「残惜しさ」を漂わせた作品である。岡田の行く末がどうあるかと、そして、岡田にとっては「恩もなく怨もなく別れた」だけの女であろうと、片側町の無縁坂に立つお玉の生は、哀れな一羽の雁が不忍池で死んだ初冬の夕暮れの一点に凝縮した。爺さんの大事なひとり娘お玉が生まれたのは、「生麦で西洋人が斬られたと云ふ年」(「陸」)、すなわち、文久二年であった。そして、鷗外森林太郎がこの世に生を受けたのは、お玉と同じ年の一月十九日のことであった。「上条と云ふ下宿屋」が自火で焼けた年の前年、すなわち明治十三年の初冬の寂しい無縁坂で「照り赫い」たお玉の顔が再び輝くことはなかったはずである。お玉もあの「舞姫」のエリスと同様に「生ける屍」の生を生き続けねばならなかった。ただちがっていたのは、太田豊太郎が帰国途中のセイゴンの港で陥入った深刻な苦悩が医学生岡田には存在しなかった点である。「只美しい物、愛すべき物」としてしかお玉を見なかった岡田には、豊太郎の感じた痛恨はなかった。岡田にとってお玉は所詮は無縁坂に囲われた「恩もなく怨もなく別れた女」であった。不忍池で岡田が逃がすべく投げた石に当って死んだ「不しあはせな雁」(「式拾参」)の意味するところには深いものがある――。

注

- (1) 「近代名作鑑賞」(至文堂) 八二頁
- (2) 「鷗外全集」⑤一―四五
- (3) 「鷗外全集」⑥一四七〇

(三) 「雁」の世界

無縁山法界寺の名に因んだ無縁坂⁽¹⁾が岡田とお玉の最初の出会いであったし、それ以後も二人の会う場所は無縁坂に限られていた。それはお玉側から見れば「囲物」の宿命であり、囲われた女のせめてもの自由は、父親のいる池の端の家に赴くことのみであり、お玉にとって無縁坂だけが自己の世界であった。無縁坂という名が「雁」の物語をもの見事に暗示すると同様の意味において、無縁坂の女お玉の名もまたその美質を表して十分である。「美しい物、愛すべき物」として、岡田にとっては正しくお玉であったし、たまさかの女としてのおたまでもあった。玉のごときたまさかの女としてのお玉は、末造の妻お常の登場によってその意味するところはより深いものとなる。

お玉という名まえをめぐっての取沙汰については数多くの指摘がある。渋川驍は「森鷗外 作家と作品」⁽²⁾において、「女主人公お玉にたいする岡田の淡い思慕は、鷗外が、「キタ」のなかで大学時代から洋行するまでひそかに思慕をよせていた、通新町の「秋貞」という古道具屋の娘が、モデルになっていることは、すでに多くの認めるところだ。ところが、このお玉は、ただ「秋貞」の娘ばかりがモデルになっているとは思えない。というのは、このお玉が妾になることをすすめられ、初めて父親につれられて、高利貸の末造にお目見えする場所は、上野広小路の「松源」で大学卒業の際催された、教授たちへの謝恩会のために出かけている。その場所で、鷗外はこう書いている。僕のすぐ脇の卒業生を掴まへて、一人の芸者が「あなた私の名はボオルよ。忘れちゃあ嫌よ」と云つてゐる。お玉とでも云ふのであろう。モデルの本名をそのまま使って、小説の人名にし、もしそれが多少さしざわりがあるときは、モデルを推定せしめる人名を使用するくせのあつた鷗外が、この芸者のお

玉と無関係に、『雁』のお玉を創造するわけがないように思われる。すると、『雁』のお玉には、この芸者の風貌がある程度写されていることだろう。したがって、『キタ』の秋貞の娘と、芸者のお玉の混合したものと考えることができる。ところで鷗外自身の妾は、この物語に一旦関係がないように見えるが、その名が「児玉せき」といって、やはり「玉」という字を中に抱いている。とすると、この女性も『雁』のお玉への連想に關係があるのではないかと考えられる。末造が、女房と喧嘩して、午前中街を歩きまわって、昌平橋にさしかかると、お玉に似た芸者とすれちがう。その顔にソバカスがあつて、やはりお玉の方が美人だと思ふところがある。ところが、児玉せきの顔には、ソバカスのあるのが特徴だつたと森於菟が伝えている。ここでは、芸者のお玉と児玉せきとが、連想的に転換されて使われているのではないか。これから押しても、『雁』のお玉が、彼の生涯のいく多の経験と観察との断片から、複雑な過程をもつて、創造されていることが考えられる。」と記している。洪川のいう於菟の証言というのは、『文芸春秋』の昭和二十九年十一月号に発表された「鷗外の隠れた愛人——文豪をめぐる女性補遺——」⁽³⁾を指すものである。於菟はその中で「私は薄化粧したおせきさんの細おもての頬が、少しふくれて下まぶたから頬にかけてそばかすが一ぱいちらばつてゐるのを見ながら、蟻をつぶしつづける手をやめなかつた。」と記している。含蓄のある一文である。

無縁坂の女お玉の命名についての穿鑿をめぐっては、洪川の指摘に、鷗外の長女茉莉の名が「鞠」と相通じており、鞠¹ボウル²玉という等式が成立することを付け加えれば十分であろう。因みに、明治四十二年三月一日発行の「昂」第三号に発表された「半日」では、主人公の文科大学教授高山峻蔵の一人娘は、「玉ちゃん」なる愛称で登場している。「舞姫」におけるエリス・ワイゲルトや太田豊太郎、相沢謙吉をめぐる命名法については長谷川泉の犀利な指摘があり、ここに紹介するまでもな

いが、末造の妻お常との対比という観点から留意すべき一節がある。『雁』の「拾壹」である。

箸を置いて、湯呑に注いだ茶を飲んでゐた爺さんは、まだつひぞ人のおとづれたことのない門の戸を開いた時、はつと思つて、湯呑を下に置いて、上り口の方を見た。二枚折の葎簀屏風にまだ姿の遮られてゐるうちに、「お父つさん」と呼んだお玉の声が聞こえた時は、すぐに起つて出迎へたいやうな気がしたのを、ちつとこらへて据わつてゐた。そしてなんと云つて遣らうかと、心の内にせはしい思案をした。「好くお父つさんの事を忘れずにゐたなあ」とでも云はうかと思つたが、そこへ急いで遣入つて来て、懐かしげに傍に來た娘を見ては、どうもそんな詞は口に出されなくなつて、自分で自分を不満足に思ひながら、黙つて娘の顔を見てゐた。

まあ、なんと云ふ美しい子だらう。不断から自慢に思つて、貧しい中にも荒い事をさせずに、身綺麗にさせて置いた積ではあつたが、十日ばかり見ずしてゐるうちに、丸で生れ替つて來たやうである。どんな忙しい暮らしをしてゐても、本能のやうに、肌と垢の附くやうな事はしてゐなかつた娘ではあるが、意識して体を磨くやうになつてゐるきのふけふに比べて見れば、爺さんの記憶にあるお玉の姿は、まだ璞の儘であつた。親が子を見ても、老人が若いものを見ても、美しいものは美しい。そして美しいものが人の心を和げる威力の下には、親だつて、老人だつて屈せずにはゐられない。

池の端の住人となつた父親のもとをお玉が「十日ばかり」経つて訪ねた場面である。無縁坂からわずかに四五町の道のりしかないにもかかわらず、親の住まいを訪れなかつたお玉に対して皮肉の一つも投げかけようと思つた父親は十日ぶりに見るお玉の生まれかわつたやうな美しさに見とれてゐる。無縁坂の女になるまでの娘は、「璞」(あらたま)のままであつた。それが末造によつて囲われてから「生れ替つて來たやう」にな

った。璞が磨きをかけられ、その美質を存分に發揮し始めた。「璞」から「お玉」へのみことな変貌は父親の腹立ちを慰撫するに十分であった。檀那との仲を父親から尋ねられたお玉は、「日影ものと云ふ秘密の奥」にあるもう一つの秘密を自分の胸にしまったまま池の端の家を後にしようとする。今まではおとなしい一方の娘であったのが、十日ばかりの後に「豪気」になったのを目のあたりにして動揺する父親に対して、「大丈夫よ、お父さんがいつも、たあ坊は正直だからとさう云つたでせう。わたくし全く正直なの。ですけれど、この頃つくづくさう思つてよ。もう人に騙されることだけは、御免を蒙りたいわ。わたくし嘘を衝いたり、人を騙したりなんかしない代には、人に騙されもしない積なの。」と話すお玉は、それまでの「たあ坊」ではない。父親の目に映つた璞の変貌の背景には無縁坂の女の心の変容がある。「籠に飼つてある鈴虫（拾）の鳴き声に耳を傾けていた末造が、箱火鉢の抽斗を半分抜いて、捜すものもないのに、中をのぞき込んでいるお玉に、「おい、お前何か考へてゐるね」と尋ねたのも無理からぬところである。

池一面に茂る蓮の葉の中に「薄い紅を点じたやうに」今朝咲いた花が見えかくれる不忍の池のほとりを、「これまで自分の胸の中に眠つてゐた或る物が醒覺したやうな、これまで人にたよつてゐた自分が、思ひ掛けず独立したやうな氣」になつて歩くお玉の手にする小さい蝙蝠傘が仲町の「たしがらや」の前でお常の視界をよぎる時、小説「雁」の世界は、新たな展開を見せることになる。「たしがらや」で菌磨を買うべく足を止めたお玉の膝の所に寄せかけていた蝙蝠傘は、お常にとつて見覚えがあつた。一月ほど前のこと、横浜から帰つた末造が、みやげにとつてお常にくれた日傘が奇しくもたしがらやの店にいる女の蝙蝠傘と同じものである。璞がみがかれて文字どおりお玉となつた無縁坂の女の挙措がお常の眼を通して次のように描かれている。

蝙蝠傘を少し内廻転させた膝の間に寄せ掛けて、帯の間から出して

持つてゐた、小さい蝦蟇口の中を、項を屈めて覗き込んだ。小さい銀貨を捜してゐるのである。

これに対して、同じ蝙蝠の日傘をはじめ手にした日のお常自身の回想として次のように記されている。

もう一月余り前の事であつた。夫が或る日横浜から帰つて、みやげに蝙蝠の日傘を買つて来た。柄がひどく長くて、張つてある切れが割合に小さい。背の高い西洋の女が手に持つておもちやにするには好からうが、ずんぐりむつくりしたお常が持つて見ると、極端に言へば、物干竿の尖へおむつを引つ掛けて持つたやうである。それでその儘差さずにして置いた。その傘は白地に細かい弁慶縞のやうな形が、藍で染め出してあつた。たしがらやの店にゐた女の蝙蝠傘がそれと同じだと云ふことを、お常ははつきり認めた。

絶妙な対照である。お常は高利貸末造の女房である。眼前に展開される光景と女中のことばに刺戟されたお常が妄想をたくましくして我が家の門を通り過ぎようとしたのも当然のことである。

「雁」の「肆」には、「窓の女の種姓」が描かれているが、それとともに大学医学部の小使であつた末造のことが記されている。入沢内科同窓会編の「入沢先生の演説と文章」に見られる岡田元助なる人物と高利貸末造との關係については既に触れられているところであるが、「雁」という作品における登場人物の命名法のみにとどまらず、「雁」という作品のモチーフにも関わる場所であり、煩を厭わず触れておきたい。

岡田元助に係る入沢証言は前掲書の第七編「追憶及回想」の中の「明治十年以後の東大医学部回顧談」に見られるものであり、昭和三年五月十七日と七月十二日の両日にわたつて医学談話会で行われた演説に基いている。入沢達吉は明治十年から十二年間に及ぶ東京大学医学部の沿革を「赤門生拔の人間」として語っており、同じ入沢の手になる「東京大学医学部沿革略史」等には見られないユーモアがあふれており、当時の

学生の生身の生態が描かれており、「雁」や「キタ・セクスアリス」の基底を形成している明治初期の学生風俗を知る上で貴重な資料でもある。因みに「雁」の肆で鷗外は、「寄宿舎には小使がゐた。それを学生は外使に使ふことが出来た。白木綿の兵古帯に、小倉袴を穿いた学生の買物は、大抵極まつてゐる。所謂「羊羹」と「金米糖」とである。羊羹と云ふのは焼芋、金米糖と云ふのははじけ豆であつたと云ふことも、文明史上の参考に書き残して置く価値があるかも知れない。小使は一度の使賃として二銭貰ふことになつてゐた。(傍線筆者)と記していた。羊羹、金米糖ともに「キタ・セクスアリス」で触れられていた隠語であつた。鷗外の自虐的な言辞の裏に、去り行く時への郷愁が見え隠れしている。「雁」一編はそういう鷗外の原風景への執着の一念の産み出した作品であり、「東京方眼図」の作者ならではの営みでもある。

学生の使走りをする「小使の一人」が末造である。赤門生抜の人人入沢達吉は明治十年十二月の時点で「どう云ふ風な学生が居たかと云ふこと」を示すべく「表」を掲げている。それによれば、医学一等本科生(二十二名)として佐々木政吉ら、二等本科生(二十五名)として、小金井良精、緒方正規らの氏名を挙げ、三等本科生三十名の中から高橋順太郎、森林太郎、中浜東一郎、甲野架、賀古鶴所、江口襄、井上虎三の名を列挙している。因みにこの年筆者入沢は芳賀栄次郎とともに予備第四級生乙に属しており、一等予科生の中には土生荘之助の名が見られる。入沢達吉はこの土生について、「土生荘之助と云ふ人は卒業はしなかつたが鷗外先生の *via sexualis* の中に度々名前が出て来るので、一寸此処にあげたのだ。」と記している。「キタ・セクスアリス」十三歳の条には、金井湛の入った東京英語学校(後に予備門と改称)寄宿舎での硬派と軟派の存在が描かれており、その中に「僕は硬派の犠牲であつた。何故といふのに、その頃の寄宿舎の中では、僕と殖生庄之助といふ生徒とが一年が若かつた。殖生は江戸の眼医者の子である。色が白い。目がぱつち

りしてゐて、唇は朱を点じたやうである。体はしなやかである。僕は色が黒くて、体が武骨で、その上田舎育ちである。それであるのに、意外にも硬派は殖生を付け廻さずに、僕を付け廻す。僕の想像では、殖生は生れながらの軟派であるので免れるものだと思つてゐたのである。」の一文がある。殖生との交際の一件で父から注意を受けた金井湛の心情と殖生その後の生の軌跡が湛十四歳の条に記されている。「僕は恐れ入つた。そして正直に殖生に、料理屋へ連れて行かれた事を話した。併しそれが殖生の祝宴であつたといふこと又は、言ひにくいので言はなかつた。殖生と絶交するのは、余程むつかしからうと思つたが、實際殆ど自然に事が進んだ。殖生は間もなく落第する。退学する。僕は其形迹を失つてしまつた。僕が洋行して帰つて妻を貰つてからであつた。或日の留守に、殖生庄之助といふ名刺を置いて行つた人があつた。株式の売買をしてゐるものだと言ひ置いて帰つたさうだ。」——入沢達吉の「土生荘之助と云ふ人は卒業はしなかつたが」なる証言と完璧なまでに契合する一文である。「殖生庄之助」と「土生荘之助」、「舞姫」におけるエリス・ワイゲルトと Elise Wiegert との関係想起せしめる鮮やかなすりかえであり、作中人物の命名法に係る鷗外の極めて特徴的な手法であり、東先生と西周、尾藤齋一と伊藤孫一、古賀鶴介と賀古鶴所、児島十二郎と緒方牧二郎の関連性も既に指摘されているところである。

入沢達吉は当時寄宿舎に入り、寄宿生となることが非常に「誇」であつたことに触れたうえで、寄宿生の生態を次のように記している。

其当時の寄宿生は今申しました通り十三、四歳の少年から、二十五、六歳若くは二十八、九歳の卒業期迄の者を收容して居りましたから中々取締が一樣に行かない。規則には門限は八時となつて居ります。殊に少年は薄暮帰舎すべしと書いてある。吾々は「薄暮連」と名を貰つた。其実本科生は乱暴であつて、夜間窓から飛出して根津に通ふやうなことが数々あつた。又門限などは全く無視して遅刻、外泊が非常

に多かつた。後で三日分も、四日分も纏めて保証人の印を捺して届書を出せば、それで済むのであつた。本当に保証人の所へ印を貰ひに行つた者もありますけれども、中には銘々が保証人の認印を造つて持つて居つて、それを勝手に捺して出したといふこともあつた。或時一学生が甚乱暴者で放蕩した揚句、急に死んだ。それで荷物を調べて見たら、皆売つて仕舞つて何も無い。唯机の引出に保証人の偽印が一個転がつて居るのを発見した。本科生などが余り外泊することが劇しいものであるから、懲戒の意味で以て、毎月月初めに寄宿舎の食堂に、前月中の各学生の外泊した数を表にして掲げたことがある。是は随分長い間続いた。其中で私の記憶して居るのでは、本科生の長谷川某と云ふものが、一ヶ月に二十五日外泊して居つた。是が大関であつた。是は監事が立案したのであるが、近々卒業すれば直ぐ月給百二十円で地方の病院長になると云ふので大した勢であつた。其頃の百二十円と云ふものは大変な金である。従つて勿論監事などは本科生の眼中になかつたのである。其上に其頃の本科生は皆大学の小使上りの岡田元助と云ふ医学士専門の高利貸「痛」と云ふ綽名があつた。其男から高利の金を、背負ひ切れない程借金して居つた。後に私の同国の小学校友達が岡田の手代になつて居つたので、其処へ時々遊びに行つた。さうして九州から青森まで医学士の貸金連名帳と云ふものがあつて、それを見たことがありますが、頗る振つたものであつて、旅費は先方持で日本中をグル／＼年中催促に廻つて居る。後には私の二、三年上の級位の者迄も矢張岡田に關係のあつた者があつた。私共は前に申す通り薄暮に寄宿舎に帰らなければならぬのであつて、又此処にあるこの一覽にある規則の通り、実際に励行して居つたのであります。即ち放歌、吟詩は勿論、小説類を読むことを禁ず、それから無用の玩具を弄することを禁ずると云ふ訳で、小説を読むことも禁じた。今から見ると想像も出来ないことでありませうけれども、實際少年に対しては、さよう

なことが励行されて居つたのであります。私は本箱の蓋の裏に紙で拵へた碁盤を張付けて、土で拵へた碁石を買つて来て、一二月間一生懸命に碁を勉強したが、二度まで監事に取上げられて仕舞つた。到頭碁を覚えなかつた。中々熱心に碁を稽古して夜、寝てから夢に白、黒を見たことを覚えて居ります。併し其頃隠れて旨くやつた連中は随分上達したのが居る。それから私は笛を買つて来て吹いたが、是も取上げられて仕舞つた。音楽も到頭駄目だつた。私は独楽を廻すことが得意であつて、まだ寄宿舎に入らぬ内であつたから、書物と一緒に独楽を包んで持つて来て能く廻して居つた。其時分まだ鞆はなかつた。皆風呂敷包みであつたが、此時私が初めて頭陀袋を肩にかけて本を入れて通つた。是は私の二十五年祝賀の時に、山極君が私の「プリオリテート」を証明して呉れた。私が大学を卒業して医者になつて仕舞つても、昔から居る小使が一人居りまして、それが私が子供の時に独楽を廻して居つたのを知つて居つて、能く冷かされて困つたことがある。さう云ふ訳で二階の本科生は酒を飲んで暴れて毎晩大騒動をやつた。

賀古鶴所氏杯は随分元気が良かった。「舞姫」における相沢謙吉、「キタ・セクスアリス」の古賀鶴介の背後に存在する「一切秘密無ク交際シタル友」賀古鶴所が引用文末尾に顔を出しており興味深い。当時の医学生は稚氣と放埒の同居した無軌道ぶりは躍如たるものがあり、「寄宿舎」と「上条と云ふ下宿屋」とのちがいはあるものの「雁」という物語の背景に位置する学生の生態は主旨推察しうるところであり、岡田が上条の「お上さん」の信頼をえて、上条の「標準的下宿人」になつてしまつたのもすべからず入沢達吉の証言に見られるような稚氣と放埒の図譜あつたことである。

「雁」という作品はいうまでもなく虚構の世界である。鷗外森林太郎というひとりの人間が明治四十四年から大正四年にかけて自らの手で創り出した虚構の世界である。しかしながら、「舞姫」や「キタ・セクス

アリス」がそうであったように、「雁」という作品も鷗外という人間の過去の体験や見聞に大きく依りかかっている。あたかも不忍池に咲く蓮の花の根が底深い泥濘の中によるべを求めているかのごとく、「雁」を支える根は鷗外の原風景の中に広がっている。

「雁」という作品の中に展開される人物と事件とをめぐって、過去の世界の人物や事象との脈絡探りについては尾形叡の秀れた業績がある。

その一斑を紹介するとすれば、「らいてうとお玉さん」の中の「典籍調べも厄介だが、鷗外が過ぎ去った青春への無限の愛情をこめて描いた明治初期の風物を現在の土地の上求めて歩く文学散歩も、あてどないことにおいてはそれと変らない。わたくしは不忍池畔に蓮玉庵を尋ね十三屋を訪ひ、無縁坂上の講安寺のこれまた八十になる老師から、無縁坂という名はもとこの寺が無縁山法界寺といったことから出たということなどを聞いて廻る中、偶然にも土地の生き字引きとでもいふべきその大野翁にめぐり会って、松源・雁鍋・伊与紋・吹抜亭・柳盛座など、なつかしい数々について聞くことができた。翁は若いころ青石横町の今泉という柔道の教師にいたそうだが、これも「雁」の中に、「ちきよその柔術の先生」と出てくる。「雁」の中には、高利貸の妾なんぞに売る肴はいよと啖呵を切る坂下の魚金という魚屋が出てくるが、翁によれば、それはほんとは魚太(うま)というのだそうである。翁はお玉さんのことを、その魚太の先々代の老人から聞いたという。高利貸の末造の隣りだと鷗外の書いている福地桜痴の邸は、いま別館茅の葉という旅館になっているのだが、お玉さんの旦那はそこに住んでいたのではなく、何でも入谷の方の質屋だったよし。を挙げれば十分であろうし、橋本多佳子の「無縁坂のお玉だった頃」という回想文に影を落とす「おたま」の重みもそれなりに一つの「雁」受容のあり方として留意される。そして、前掲の入沢証言をめぐっての「雁」の基盤への肉迫という問題については、佐藤良雄の「雁」のモデルと開成学校・医学学校」のさめた分析を挙げれ

ば大旨の問題は解決される。佐藤のさわりの部分を紹介すると以下の二つになる。すなわち、第一点は「雁」という作品名に関する問題であり、第二点は登場人物の中の医学生岡田と高利貸末造の命名に係る問題である。佐藤は入沢証言を紹介したうえで、前者について、「われわれは図らずも、この一文において、高利貸にガン(癌)という綽名がつけられていたことを知った。これが演説筆記でガン(雁)をあやまつてガン(癌)としたのか。集まる人も話す人もみな医者だから、ガンに病名の一字をあてて敢て不審におもわなかつたのか。医学書生には、病名によつて物事を形容するくせがあるのではなからうか。小説「雁」の中で、神田の今川小路のややこしい街路を、虫様突起のようだと云つているところがある。ガン(癌)で高利貸を言いあらわすのも医者仲間の慣例だつたかもしれない。ひるがえつて考えるに、高利貸は金を貸すのが商売であり、借りた方からみれば、その金はカリガネであり、カリである。そして、どちらとも鳥の名のガン(雁)に通じるものである。ところが、カリガネやカリはシャッキンとおなじように、むきだしな言葉である。隠語にするには字音のガン(雁)がよい。そして、それがガン(雁)にかわる。高利貸には執拗さがある。病気のガンも執拗である。」と記している。文中の今川小路云々は、「拾漆」の「医学生が虫様突起と名づけた狭い横町」に係る指摘である。また、佐藤は後者について、「岡田元助が末造のモデルであるという見方をさだめておいて考えてみると、元助の一字モト(元)に対する語のスエ(末)を高利貸の名にして、末造なる人物をつくり出したのは洒落ではないか。末造は「雁」の中ではいつも名だけではばれている。姓はどうしたか。それは面白いことに医学生の岡田となつてゐる。岡田は名を以つてよばれることなく、姓でいつもよばれている。こうして、一人の名前である岡田元助を半分に割つて、お玉の主人と恋人とを書きわけたとすれば随分の洒落である。日本文学の中では、隠された洒落をよみとらねばならぬことがよくある。」として竹

取物語の例を挙げている。岡田元助なる人物の上半身が近代日本の将来を背負うべき医学生生の姓となり、残る下半身の元助なる名まえが元と末との入れ換えの結果、末造なる高利貸として結実したという指摘は意味が深い。上野不忍池界限には、古い時代を継承しながら生きる人々と、近代日本の夢を託された若者とが踵を接しながら生きていた。その二つの世界の住人の接点が無縁坂であった。岡田とお玉が結ばれる可能性はそもそもその出会いから絶無であった。そういう二人の間に作者鷗外はかりそめの掛橋を架けてみた。そして、自ら架けた掛橋を壊すべく、上条の夕餉の膳に青魚の未醬炙を用意した。お玉と岡田がはじめて出会ったのも偶然の産物であったし、お玉と岡田とが結ばれることなく別れてしまふのも偶然の然らしむるところであった。元来、必然的なものとして別の世界に住むはずの医学生岡田と高利貸の妾お玉との間に掛橋を作り、その掛橋を渡ろうとするお玉の空想を青魚の未醬炙でももののみごとにくだいてしまった鷗外の筆は冴えている。鷗外は明治二十二年一月三日「読売新聞」に発表した「小説論」において、「余は医なり一把解体の刀、久しく拳を離れず一条茭葉の筒、屢々指に触れども事実を捜究するの熱心は未だ曾て無何有の郷に遊ぶの夢を妨げず「カルネリー」謂へることあり「イデアール」は吾党の北斗なり而して吾党の目的に非ずと読者諸君よ彼の目的の為に北斗を忘るゝの徒に与すること莫れ」と記している。「余」のみならず、上条の住人岡田も「医」となるべき人物であった。鷗外の長編小説「雁」は明治十三年を当世とする「書生氣質」であるとともに、鷗外自身の青春のイリュージョンの産物でもあった。片岡良一の「せっかく自我に目ざめて、そうしてその目ざめた自我の道に強く踏み出そうとしながら、その道をぞうさもなく閉ざされてしまったことを書いた「雁」の世界は、そう思うと、それが明治十三年の話であろうと同時に、この自然主義敗北の明治末年の気運とも直接的に結びつくものであることが、よく知られるのではないか。自然主義時代の直

後には、こんな風に人間の自我を、従って人間の力を、弱々しくはかないものと思うもちが時代一般に磅礴していたのである。⁽¹⁾という指摘の中に、「雁」という小説の構造の秘密がある。そして、「肆」から「拾伍」に至る部分の異常なほどの長さは「雁」の世界を形成する重要な要素である。末造にとつては、「事実の範垣内を彷徨」⁽²⁾することのみで充たされた生は所詮空しいものであった。末造が「口やかましい女房」お常を「懐く思ふ」⁽³⁾ようになったとしても不思議ではない。末造の「無何有の郷に遊ぶの夢」をかなえるべき女がお玉であった。日常性にあきたらなくなつた末造の生の構図を描くためにも「肆」から「拾伍」に至る「雁」の②の部分膨張する必要があつた。お常という事実性に立脚してはじめてお玉という無縁坂の女の存在が光彩を放つことになる。因みに「小説論」で「無何有の郷」なる語を用いた鷗外は、明治二十九年十二月十八日春陽堂からの刊行に際し、「医学の説より出でたる小説論」という名に改題するとともに、「事實は良材なり。されどこれを役することは、空想の力によりて做し得べきのみ。ドオエがゾラに優れるはこゝに得る所ありてならむ。」⁽⁴⁾としている。「無何有の郷に遊ぶの夢」、すなわち、「空想の力」によつて過ぎ去つた明治十三年の世界に遊ぶためには、湯帰りの女お玉はあくまで美しくなければならなかつた。鷗外森林太郎にとつても、お玉にとつても、そして、「金の事より外、何一つ考へたことのない」末造にとつても、「無何有の郷に遊ぶの夢」はその生のために不可欠のものであつた。「雁」の肆から拾伍に至る部分が異常に膨らんだものとなつたのも必然のなせるわざであつた。大正四年五月十五日穀山書店から刊行された「雁」は鷗外森林太郎のロマンチズムが存分に発揚された作品である。お玉も、そして作者自身も五十四歳の年のことである――。

注

- (1) 尾形仿「らいてうとお玉さん——鷗外注釈余瀝——」(『国文学言語と文芸』十一号、昭和三十六年十一月) 筑摩書房刊、一一九頁
- (2) 二四四—二四八頁
- (3) 「鷗外作中人物命名のバズル」(一九八一年七月十八日付図書新聞)
- (4) 入沢達吉著述 入沢内科同窓会編(昭和七年克誠堂刊)
- (5) 大正十二年東京帝国大学医学部刊
- (6) 大正十一年七月六日付遺言
- (7) 「文学散歩」一五号 昭和三十七年十月
- (8) 「鷗外」第四号 昭和四十三年十一月
- (9) 「鷗外全集」⑬—四五一
- (10) 新潮文庫版「雁」解説
- (11) 「小説論」
- (12) 「雁」肆
- (13) 「鷗外全集」⑫—二
- (14)

(昭和六十二年四月一日 受理)
(昭和六十二年八月五日 発行)